

編集後記

WASEDA RILAS JOURNAL No.8 をお届けします。

本ジャーナルは、早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌として、2013年の創刊以来、毎号充実した内容を積み重ねてきました。そして本号にはこれまでで最多数となる投稿申請が寄せられ、ここに一般投稿論文23本、研究ノート・報告・翻訳4本、特集7本を掲載することができました。なお本号の編集は、実際には、2020年9月まで早稲田大学総合人文科学研究センター（以下、「人文研」）の運営にあたられた陣野英則前所長、伊川健二前副所長をはじめ、助教・助手の皆さま、文学学術院事務所のスタッフの皆さまの多大なご尽力によってなされたものです。また、ご寄稿くださった各位、投稿論文の査読にご協力いただいた方々や人文研運営委員会委員各位など、本ジャーナル刊行のためにお力添えくださった全ての皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。

本号の主たる骨格をなす一般投稿（論文、研究ノート・報告・翻訳）は、人文研の研究所員、招聘研究員のみなならず、その他の早稲田大学専任教員および非常勤講師、また早稲田大学大学院文学研究科の出身者と正規学生、さらには訪問学者やリサーチフェローからの投稿論文を合わせ、人文社会の各領域にわたる多彩な内容のものとなりました。なかには英語や中国語による論文も複数含まれています。

また本ジャーナルは人文研の研究部門の研究発信を支え、研究交流の促進を図る目的もあります。本号には合計6研究部門による特集が組まれました。

そのうち、研究部門「知の蓄積と活用に向けた方法論的研究」により開催された国際シンポジウム「産業の労働・経験をどのように記録し、継承するか 石炭産業の場合」は、2019年度の人文研年次フォーラムとして、当該部門代表の嶋崎尚子教授が中心となり企画、実施されたものです。

また、「トランスナショナル社会と日本文化」、「現代社会における危機の解明と共生社会創出に向けた研究」、「創作と翻訳の超領域的研究」、「境界の溶解と再編をめぐる学際的研究」、「拡大するムスリム社会との共生：歴史的背景とグローバル化」の各研究部門からは、それぞれ部門が主催・共催したシンポジウムや国際会議、ワークショップ、イベントなどに関わる論文や報告をお寄せいただきました。さらには早稲田大学国際文学館主催、SGU国際日本学拠点共催にて行われた国際シンポジウムの見聞記を掲載しました。誌面からは、これらの研究活動の具体的内容、および現在の人文科学研究の進展状況や達成点、あるいは今後検討がなされるべき問題を読み取っていただけのではないかと思います。

人文研の各研究部門の名称には、人文社会研究の現況や課題を示すキーワードが満ちています。これらの課題に取り組み、人文社会研究をリードする活動を支える基盤として、人文研、そして本ジャーナルが有効に機能していくよう、努力していきたいと思えます。感染症の影響により世界中の誰もが未曾有の状況から逃れることができない今こそ、本ジャーナルが人文科学の果たすべき役割を自らにも問いつつ発信していくものとなることを願います。

（早稲田大学総合人文科学研究センター所長 河野貴美子）